



医師



第14回市民健康セミナーの開催報告

神経内科部長 亀山 隆

平成29年11月11日(土) 当院講堂にて第14回市民健康セミナー『がん医療の最前線～胆道・膵臓がんと女性のがん～』が開催されました。当院では毎年1回はがんをテーマに市民健康セミナーを開催しています。今回のテーマは早期発見が難しく治療が難しいことが多い「胆道・膵臓がん」と、婦人科のがんである「子宮がんと卵巣がん」でした。二人にひとりがんになるといわれているがんの話題に、約140名の市民の皆さんが参加いただき、皆さん大変熱心に聴講され盛況でした。

最初に『胆道・膵臓がんについて』と題して消化器内科部長の児玉佳子先生が講演されました。これらのがんは死亡率が全がんのなかで胆道がんが6位、膵臓がんは4位と高く、現在でも根治が難しいことがわかりました。また膵臓がんの危険因子(なりやすい人)としてお酒の飲み過ぎなどによる慢性膵炎や膵臓のう胞(膵臓にふくらむことができる)のほか、糖尿病があげられ注目されました。膵臓がん患者の17%は糖尿病があるとのことでした。また遺伝性の方が全体の5~10%いるとのこと、家族に膵臓がんのいる人は要注意です。

続いて、名古屋大学産婦人科教授の吉川史隆先生が『知っておこう 女性特有のがん～女性として、母として～』と題して婦人科のがんについて、大変わかりやすく講演されました。まず子宮頸がんについては、20~30歳代の若年女性で発症率や死亡率が増加していることに大変驚きました。初発症状は不正性器出血であり、負担の少ない簡単・確実な検査で早期診断が可能。しかも子宮頸がんは進行がゆっくりで、早期がんなら簡単な手術で完治できて、その後の妊娠・出産も可能とのことでした。原因はヒトパピローマウイルスの感染で、ワクチンで7~8割は予防可能ですが、日本ではワクチン接種の推奨が、諸事情により取り下げられています(先進国では日本だけだそうです)。若い女性に増えている

子宮頸がんは、ワクチンによる予防や検診による早期発見で、治療の後遺症などなく、大変よくコントロールできることがよく理解できました。

次に子宮体がんは、閉経後の50歳台で最も多く、子供を産んでいなくて、閉経が遅く、肥満で糖尿病のある人に発症しやすく、発症するとすぐに性器出血するので、出血してからの来院で十分間に合うとのことでした(ただし閉経前後は要注意)。

卵巣の腫瘍については、85%が良性の卵巣のう腫で、残りの15%が悪性の卵巣がんです。卵巣がんは年齢とともに発症率と死亡率が増加する特徴があり、自覚症状が乏しく発見が難しく、おなかの中にがん細胞が散らばりやすく、手術と抗がん剤による治療でも経過はあまりよくないとのことでした。

3人にひとりががんで死亡する21世紀において、毎日の食事と栄養、良質の睡眠、過度のストレス回避と前向き思考が、がん予防の基本にあり、さらに信頼できる「かかりつけ医」を持つことも重要と助言されました。そして最後に、特に未来ある若い女性を侵す子宮頸がんは検診で早期診断・完治可能なので、参加された皆さんも帰宅後、家族、特に子供や孫にも「女性として、母として知っておきたい女性特有のがんの知識」を分かちあい、検診を促すようにと強調して、講演を締めくくりました。私を含めて約3割を占めた男性参加者にとっても、夫として父として知っておくべき女性特有のがんについて、大変よく理解することができ、とても有意義な講演でした。

